

研修親睦旅行 南房総鴨川温泉「鴨川館」

平成29年9月9日(土)～10日(日)

## INDEX

研修親睦旅行	1
親睦委員会	
花火フェスタ観覧	2
臼井先生連載	2
会員企業訪問	3
例会委員会報告	4
スケジュール/編集後記	4

## 電車、路線バス、遊覧船、マイクロバスを堪能！



今年の研修親睦旅行は初めて、県内は鴨川館での泊りとなりました。

気軽な気持ちで参加してほしいとの宍倉委員長発案で、当初は旅館へ直行する案でしたが、委員会での検討によって、往路は特急電車と路線バス、帰路はマイクロバスを使う基本コースが決まり、電車で17名と直行8名の合計25名が参加しました。

委員長の「営業力」でビジターも多数参加され、旅館での親睦は美味しい料理とお酒の勢いで常にも増して盛り上がりました(詳細は覚えてないので割愛)。

往路は鋸山へロープウェイで登り、素晴らしい眺望を楽しみ、金谷港での食事と長い路線バスを堪能しました。帰路は小学生以来の鯛ノ浦遊覧と東京ドイツ村でのバーベキューと結構盛りだくさんの南房総の旅を存分に楽しみました。  
 (阿佐幸雄 記)



## 幻想的で華美な世界を堪能

幕張ビーチ花火フェスタ2017へと月星会の親睦委員会の催しで楽しんで参りました。

参加者は24名（会員10名、家族・従業員・ビジター14名で参加人数は若干少なめでしたが、ビジターに多く参加していただき盛り上がりました。

私は孫娘（5）と従業員2名、従業員の娘さんを連れて参加しました。場所確保のため17時30分には会場に到着して、テープで席を確保した後はビールを飲みながら穴倉委員長たちがお弁当や冷えたビール（穴倉さんから差し入れ）を搬入してくれるのを待ちました。

19時になり、花火が優美に舞い上がり始め、2万発の鮮やかな色彩のコントラストの花火が激しく、かつ切れ目なく夜空を飾り、時には海辺を平行に流れ、時には空に向かい一直線に上がり、花開くバックミュージックと相俟って、幻想的で華美な世界へと引き込まれていきました。



月星会からの配布のお弁当やビールも美味しく、今年の花火大会は例年に比べて最高に盛り上がりました。

（親睦委員 中島美香）

### 連載

#### うすい日出男の 〈こくせいふかん〉の目

## 不思議な国民だね！

### 何故それを不思議と思わないのか？

安倍総理が衆議院を解散した。野党は「名分なき解散」などといっているが、解散は正に総理の専権であって、総理が一番勝てる今を選ぶことができるのだ。ただ、国民投票の発議に必要な議席を確保するのはなかなか難しい。

各位のご支援を願いたい。

#### 【その一】

曰く「日本は“平和憲法”を70年間守り続けてきた」と、胸を張って堂々と言う学者がいる。現象としては、戦後70年間ただの一度も改正したことがないのだから、誤りとはいえないが、本来なら「占領軍によって押し付けられた憲法を日本人の手で改めたいと思ったが、残念ながら発議に必要な衆参両院共の3分の2の議席を得ることができなかつたので改正できなかった」と言うべきではないか。結論としては“できなかった”のだが、意とする処はまったく逆なのだが、誠に不思議なことに、この平和憲

法厳守論に同感する国民が多いことが不思議でならない。

ともかく現在やっと戦後初めて、国会発議に必要な衆参共の3分の2を超える議席を有することができているのだ。この機会を生かすことを切に願う。



#### 【その二】

東日本大震災を初めとする最近の大規模災害における自衛隊の活躍は素晴らしいものがあり、国民のその働きに対する「自衛隊さんありがとう」という国民の声は、広く聴かれるようになってきており、その声は80%を超えている。

一方では、そのように自衛隊を信頼し、頼りにしているにも拘わらず、現行憲法に全く存在を示されていない自衛隊の存在の明確化には懐疑的な国民が多いというのは、どうも納得がいかない。国民が困っている時は助けをもらいたい、しかしその自衛隊が国民の誇りある立場にすることについてはどうでもよいという風潮は戦後長く続く平和の中で、平和ボケした日本人だ。反省すべきだと思う。

元衆議院議員 白井日出男

## アスリート経営者の躍動

寿司屋からホテル事業、そしてトップランナー

### 開墾と苦学の少年時代

本稿の取材のために林昇志社主にお会いすると、開口一番「これ、子供たちが作ってくれましてね」と、満面の笑みを浮かべて大判の冊子を私たちに渡してくれた。

タイトルは「林昇志Vol. 1」。「私のこれまでの人生がここに描かれていますよ」と社主。ページをめくって目立つのはアスリート姿の社主である。

その一葉、フルマラソンのゴール近くであろうか、競技場の観客席を背景にして走る勇姿が目には焼きつく。傍にこんな一文が書かれていた。

「私の原動力は体力も気力も他の人よりあるということですかね。マラソンは苦しいスポーツです。でも乗り越えること、つらいことを乗り越えるのが、いいんですよ」

林社主のマラソンやトライアスロンについては、月星会員なら誰でも知っていることであろう。凄いのは、若い頃の話ではなく、普通のアスリートならすでに引退している年齢から始めていることだ。

たとえばマラソンのトレーニングを始めたのは40歳、フルマラソンを走ったのは45歳からだという。そして何よりも特筆したいのは、58歳のときに河口湖マラソンの55～64歳の部で優勝したことである。タイムはなんと2時間50分15秒！これは年代別の日本記録となった。

若い頃に走り始めていたらどんな記録が出ていたのか。本人も言っているが、オリンピックに出てメダルを取るところまで想像してしまう。

県立船橋高校時代には柔道でも名を馳せたくらいだから運動神経はもともと抜群だった。環境が違えば、おそらく一流のアスリート人生を送っていたのではあるまいか。

林社主は、昭和9年に東京の西巣鴨に生まれている。父親の家は山梨で製瓦工場を営んでいたが、ダム建設のために閉鎖を余儀なくされて上京。父親は作家を目指しながら紙問屋など様々な商売をして家族を養っていたが、空襲で焼け出される。

戦後、10人家族で千葉県の犢橋地区（戦前の鷹之台ゴルフ倶楽部跡地）に開拓団として入植。小学生だった林社主も開墾を手伝い、数年を経てようやく作物を収穫できるようになったところで、今度はゴルフ場建設（現在の鷹之台カンツリー倶楽部）のために追い出される羽目に。

反対闘争もしたようだが結局、30万円の立ち退き料を受け

取り、西千葉に移り住んだ。

林社主の幼少から少年時代は、かくのごとく波乱と苦学の連続だった。生活は苦しく、特待生で入った船高時代には弁当も満足に持って行けなかったと言う。

しかし、少年時代の話をする社主はどこか誇らしげで、辛い思い出という印象はない。理由の一つは、波乱万丈の中で文を書き絵も描きながら必死に家族を養った父親を尊敬していること。もう一つは、厳しい開拓時代が自身の体力と精神力を鍛えたという思いがあるからだろう。

ちなみに、社主の父は林清継の名で60歳から作家デビュー、10冊ほどの作品を上梓している。幕末の千葉県内で起きた事件を題材にした『九十九里叛乱』が代表作で、この本の内容を社主は熱く語ってくれた。

### 小さな寿司屋の大繁盛

西千葉に移ってからの昭和28年、高校を卒業した社主は証券会社に入社したもののわずか1カ月で会社が倒産。そこで考えたのが自分で商売を始めることだった。

選んだのは寿司屋。自宅の一部、5坪ほどを改築して小さな寿司屋を開業した。これが現在の鮎割煮みどりとホテルグリーンタワーの出発点にほかならない。

父親同様に家族想いの社主は、自分で一家を背負う覚悟をもって奮闘した。店名の「みどり」は妹の美鳥さんに因んで付けたものである。

当初、板前に給料を払えなくなるほど苦しい船出だったが、社主自ら握り出してから人気店になっていった。

「カウンターでお客と話しながらか握っていたらファンが広がっていったんです。勝因は話題でしょうね」

話題の広さに加えて、若いながらも人を惹きつける人間的な魅力があったようだ。評判は一気に近隣に広がり、出前も急速に増えた。一日平均100件、正月には最高320件の出前を記録している。

昭和35年には2階建ての店に改装、42年には地上4階、地下1階のビルに建て替えた。

「あのまま寿司屋で展開していたら、銚子丸くらいにはなっていたでしょうね(笑)。でも、京成ホテルで自分の結婚式を挙げてから、これからはホテルの時代だと思い、ホテル事業に気持ちが向いていったのです」

ホテル事業挑戦への前哨戦というべきか、まずは昭和59年に結婚式場「ちば玉姫殿」を開業。ここでプライダサービスノウハウを蓄積した。そして、千葉県の幕張副都心構想をチャンスと見て、念願のホテル事業へと舵を切ったのである。(次号に続く) (取材・文/奥平)





## 例会委員会報告

7月例会 平成29年7月27日(木)

於：鮭割烹みどり

今期初めての夕食例会を7月27日(木)に開催しました。今期の例会は、会員の卓話、企業PRを中心とした企画を立てるという活動方針の下、7月の卓話は例会副委員長でもある金田敏彦会員（㈱カナダ工作所）にお願いしました。卓話の題は「会社経営に携わった40年間を振り返って」で、自らの経営体験を率直にお話いただきました。



5年間のサラリーマン生活から丁寧にストーリーを話されたので、30分では時間が足りなかったようです。「会社は誰のものかを考えた」「給与体系を作ってから会社は変わった」など、企業経営の核心を突く話も含まれ、みんな耳をダンボにして聴いていました。「社員の面倒を見るのは会社、会社の面倒を見るのは社長、社長の面倒を見るのは家族と浮世の風」との言葉も印象に残っています。

志村美知子例会副委員長の名司会による卓話後の質疑応答もあり、給与体系をはじめとする実務に関する質問など活発な意見交換がなされました。参加者は会員34名、ビジター1名の計35名でした。

8月例会 平成29年8月24日(木)

於：鮭割烹みどり

8月例会は24日(木)に開催しました。卓話講師は御園一成会員（㈱ジェイシー教育研究所）「仕事としての老年学—10分1000円からのスタート」と題して、笑いたっぷりに高齢者問題を正面から語っていただきました。



「10分1000円」というのは、国内外で600店以上のヘアカット専門店を展開する「QBハウス」の基本料金。これが

今日のサービス業の基準価格だというわけです。

御園さんは、自身が体験した多くの失敗談を披歴しながら、今日の高齢社会におけるビジネスのあり方を多岐にわたる視点から話されました。

「老年学」というのは、御園さんが桜美林大学老年学総合研究所の連携研究員として真摯に研究しているテーマで、当日は参加者全員に「日本人成人の高齢者の性に関する知識」と題する16頁のレポートを配布してくれました。ちなみに、「老年学」とは「高齢者及び高齢社会を研究課題として、医学、心理学および社会学あるいは社会福祉学などの各分野から多面的に解明していく学問」（当日の卓話のために御園さんがパワーポイントで作成した資料より）だそうです。卓話の題に「仕事として」とあるように、御園さんはこの老年学をベースに、新規事業としてカンボジアでのKAI GO日本語学院を展開しています。当日の参加者は、会員28名、ビジター3名の計31名でした。



（7月、8月共、吉田光一例会委員長。広報委員の奥平が一部内容を加筆しています）

## 会員異動 新入会



長谷川 淳

昭和43年9月25日生

血液型 B型

事業所名 株式会社長谷川商事

役職 常務取締役

所在地 千葉県美浜区幸町1-15-3

TEL. 043-246-3266

FAX. 043-241-4793

携帯電話 090-6152-4422

趣味：旅行・ツーリング 他

家族：妻、長女、長男

## 10・11・12月のスケジュール

10/4(水)	役員会	18:00開会	ホテル菜の花
10/21(土)	第1回経営研修会	19:00開会	ホテルグリーンタワー幕張
	講師 (株)協同工芸社 代表取締役 箕輪 晃氏		
	参加費 講演会 無料		
	懇親会 会員5,000円		ビジター 6,000円
10/26(木)	夕食例会	18:30開会	会場：鮭割烹みどり 参加費 会員3,000円 ビジター 4,000円
11/1(水)	役員会	18:00開会	ホテル菜の花
11/22(水)	夕食例会	18:30開会	会場：鮭割烹みどり 参加費 会員3,000円 ビジター 4,000円
12/6(水)	役員会	18:00開会	ホテル菜の花
12/21(木)	夕食例会	18:30開会	会場：鮭割烹みどり 参加費 会員3,000円 ビジター 4,000円

## 編集後記

今期から初めて編集委員会にほんの少しだけ関わらせていただきましたが、会員の皆様の得意分野の連係プレーで会報が制作されている様子を垣間見ることができ、月星会が長年育ててきた会員相互のつながりの貴重さを感じました。

政界は急きょ衆議院解散となり、一寸先は。。。の状況の中で門山ともども慌ただしく過ごしています。常在戦場と言われますが今がまさに戦場。よいご報告ができました皆様にお会いできるよう頑張ります。（石原裕久）